

野ばら

小川未明

大きな国と、それよりはすこし小さな国とが隣り合っていました。当座、その二つの国の間には、なにごともしず平和でありました。

ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊が派遣されて、国境を定めた石碑を守っていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして、小さな国の兵士は青年でありました。

二人は、石碑の建っている右と左に番をしていました。いたってさびしい山でありました。そして、まれにしかその辺を旅する人影は見られなかったのです。

初め、たがいに顔を知り合わない間は、二人は敵味方かというような感じがして、ろくろくものもいませんでしたけれど、いつしか二人は仲よしになつてしまいました。二人は、ほかに話をする相手もな

く退屈たいくつであつたからであります。そして、春はるの日は長ながく、うららかに、頭あたまの上に照り輝かがやいているからであります。

ちようど、国境こくぎょうのところには、だれが植うえたといふこともなく、一株ひとかぶの野ばらがしげっていました。その花はなには、朝早くからみつばちが飛とんできて集あつまっていました。その快こころよい羽音はおとが、まだ二人の眠ねむつているうちから、夢心地ゆめごころに耳みみに聞こえました。

「どれ、もう起きおようか。あんなにみつばちがきている。」と、二人は申し合わせたように起きもう あました。そして外そとへ出ると、はたして、太陽たいようは木きのこずえの上に元氣げんきよく輝かがやいていました。

二人は、岩間いわまからわき出る清水しみずで口くちをすすぎ、顔かおを洗あらいにまいますと、顔てんきを合わせました。

「やあ、おはよう。いい天気てんきでございますな。」
「ほんとうにいい天気です。天気きがいいと、気持ちきもちがせいせいします。」

二人は、そこでこんな立たち話はなしをしました。たがい

に、頭あたまを上げて、あたりあたりの景色けしきをながめました。毎日まいにち見みている景色でも、新しい感じを見る度に心こころに与あたえるものです。

青年せいねんは最初将棋さいしよしようぎの歩み方あゆ かたを知りませんでした。けれど老人ろうじんについて、それを教おそわりましてから、このごろはのどかな昼ひるごろには、二人は毎日向かい合まいにちむ あって将棋さを差していました。

初めはじのうち、老人のほうがつつと強つよくて、駒こまを落おとして差さしていましたが、しまいにはあたりまえに差さして、老人が負まかされることもありました。

この青年も、老人も、いたっていい人々ひとびとでありました。二人とも正直しようじきで、しんせつでありました。二人はいつしようにけんめいで、将棋盤しようぎばんの上で争うえ あらそつても、心こころは打ち解けていました。

「やあ、これは俺おれの負けかいな。こう逃にげつづけでは苦くるしくてかなわない。ほんとうの戦争せんそうだったら、どんなだかしれん。」と、老人はいつて、大きな口を開あけて笑わらいました。

青年は、また勝ちみがあるのでうれしそうな顔つきをして、いっしょうけんめいに目を輝かしながら、相手の王さまを追っていました。

小鳥はこずえの上で、おもしろそうに唄っていました。白いばらの花からは、よい香りを送ってきました。

冬は、やはりその国にもあったのです。寒くなる
と老人は、南の方を恋しがりました。

その方には、せがれや、孫が住んでいました。
「早く、暇をもらって帰りたいものだ。」と、老人は
いいました。

「あなたがお帰りになれば、知らぬ人がかわりにくる
でしょう。やはりしんせつな、やさしい人ならいいが、
敵、味方というような考えをもった人だと困ります。
どうか、もうしばらくいてください。そのうちには、
春がきます。」と、青年はいいました。

やがて冬が去^さって、また春となりました。ちょうど
 そのころ、この二つの国^{くに}は、なにかの利益問題^{りえきもんだい}から、
 戦争^{せんそう}を始めました。そうしますと、これまで毎日、仲^な
 むつまじく、暮^くらしていた二人は、敵^{てき}、味方^{みかた}の間柄^{あいだがら}
 になったのです。それがいかにも、不思議^{ふしぎ}なことと思^{おも}
 われました。

「さあ、おまえさんと私^{わたし}は今日^{きょう}から敵^{かたき}どうしにな
 ったのだ。私^{わたし}はこんなに老いぼれていても少佐^{しょうさ}だか
 ら、私^{わたし}の首^{くび}を持ってゆけば、あなたは出世^{しゅっせ}ができる。
 だから殺^{ころ}してください。」と、老人^{らうじん}はいいました。

これを聞^きくと、青年^{せいねん}は、あきれた顔^{かお}をして、
 「なにをいわれますか。どうして私^{わたし}とあなたとが
 敵^{かたき}どうしでしょう。私の敵^{かたき}は、ほかになければな
 りません。戦争^{せんそう}はずっと北^{きた}の方^{ほう}で開^{ひら}かれています。
 私は、そこへいつて戦^{たたか}います。」と、青年^{せいねん}はいい残^{のこ}
 て、去^さってしまいました。

国境には、ただ一人老人だけが残されました。青
 年のいなくなった日から、老人は、茫然として日を送
 りました。野ばらの花が咲いて、みつばちは、日が上
 がると、暮れるころまで群がっています。いま戦争は、
 ずっと遠くでしているので、たとえ耳を澄ましても、
 空をながめても、鉄砲の音も聞こえなければ、黒い
 煙の影すら見られなかったのであります。老人はそ
 の日から、青年の身の上を案じていました。日はこう
 してたちました。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は
 戦争について、どうなったかとたずねました。すると、
 旅人は、小さな国が負けて、その国の兵士はみなごろ
 しになって、戦争は終わったということをお告げしました。

老人は、そんなら青年も死んだのではないかと思
 いました。そんなことを気にかけながら石碑の礎に
 腰をかけて、うつむいていますと、いつか知らず、う

とうとうと居眠りいねむをしました。かなたから、おおぜいの
人のくるけはいがしました。見ると、一列いちれつの軍隊ぐんたいで
ありました。そして馬うまに乗ってそれを指揮しきするのは、
かの青年でありました。その軍隊はきわめて静粛せいしゆくで
声こえひとつたてません。やがて老人ろうじんの前まえを通るときに、
青年は黙礼もくれいをして、ばらの花をかいだのでありまし
た。

老人は、なにかものをいおうとすると目めがさめまし
た。それはまったく夢ゆめであつたのです。それから一月ひとつき
ばかりしますと、野のばらが枯かれてしまいました。その
年としの秋あき、老人は南みなみの方ほうへ暇ひまをもらって帰かえりました。

【参考資料】

・「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp>